

特集

支え合いの拠点をどうつくる

～地域の寺院と大学による、新しい共有価値の創出～

クローズアップ「この人」……………	7
おすすめ書籍「ブックレビュー」……………	8
災害に備える 「③過去から学ぶ」……………	8

支え合いの拠点をどうつくる

地域の寺院と大学による、新しい共有価値の創出

かつてお寺は、人と人が集まり、

地域に流れる時間と価値観を確かめる重要な共有スペースでした。

ところが、時代の流れと人のニーズの変化は、

そんなお寺の機能性を遠ざけてしまいました。

一方で、地域福祉の拠点づくりの必要性が

にわかに高まってきた現代、

地域の輪の真ん中にあった寺院を、

もう一度活用できないかと模索する向きが現れました。

社会科学の研究者たちです。

ここでは実際に江別市内で行われた

コラボレーションの事例を通じて、

「居場所づくり」の意義を考えます。



お寺に子どもたちの声が響く

江別市の中心市街地の一角にある眞願寺は、浄土真宗本願寺派の寺院。威厳ある立派な山門が目を引く、地域のランドマークです。

このお寺に、たくさんの子どもの歓声が響く日があります。およそ2か月に一度、「北翔大学 子ども食堂・地域食堂☆しんがんじ」が開催されるのです。

昭和の昔ならいざ知らず、平



眞願寺山門

成、令和と時代が進むにつれ、

お寺の境内で遊ぶ子どもの姿を見ることは、とても稀になってしまいました。ところが子ども食堂・地域食堂の開催日は、夕

暮れと共に子どもたちが続々とやってきては、食事や遊びを楽しみます。その姿に昔も今も違いはありません。

小学生の多くがスマートフォンを持ち、バーチャルのEスポー

必然の邂逅

眞願寺の子ども食堂・地域食堂は、北翔大学生涯スポーツ学部健康福祉学科の尾形良子准教授が、眞願寺住職の石堂了正氏に協働を持ち掛けたことから始まりました。

石堂氏は江別市民児協で主任

ツに興じる現代っ子の姿は影を潜め、学年の垣根を越えてボール遊びや輪投げなどに興じます。それを見守るのは地域の住民。

自分の子にもよその子にも同じように接し、子どもが遊び終えると同じメニューで食事をします。今では失われた古き良き文化が、お寺の中で復活する夕べ。取材を行った日には、100名を超える参加者が集まっていた。この暖かな空間は、一体どのようなにして始まったのでしょうか。

一方の尾形氏は「研究するけれど現場でも働ける」

ことを信条とする、アクティブなフィールド実践主義者です。客観性を担保するために並走観察にとどまりがちな従前の研究手法とは違い、戦略的に社会を科学しながらも、課題解消の手法をトライ&エラーで見出していく現代的な感覚の研究者と言えます。

尾形氏は自らが立ち上げた「支え合いの拠点(居場所)づくりの支援のための研究・実践グループ」による「北翔大学・子ども食堂と地域食堂プロジェクト」の会場兼担い手として、眞願寺に白羽の矢を立てました。

一方の石堂氏は、食事の支度

両者の邂逅は昨年。プロジェクトの内容をすり合わせて平成30年12月に最初の食堂を開催して以来、これまでの開催回数は6度を数えるようになりました。開催日には、尾形氏が指導する学生たちが、ボランティアとして参画。子どもと一緒に遊んだり食事の支度をした

をする厨房から、子どもが走り回る本堂までをくまなく巡回しては、参加者やスタッフすべてとコミュニケーションを図りま

す。乳児を抱いた若いお母さんと親しげに話しているのを見て、檀家さんですかと伺うと、「いやいや、近所に住んでいる親子です。抱かれています子が生まれた





遊ぶ子どもたち

子ども食堂と地域食堂

ころから顔なじみで」と笑います。食事が佳境を迎えたのを見計らい、石堂氏の説法が始まります。それまで賑やかだった会場がしんと静まり、大人も子どもも石堂さんの語る言葉

に耳を澄ませるさまは圧巻。人と人、人と地域の絆について穏やかに説くその内容はとても意義深く、参加者それぞれの解釈で深く意識に刻み込んでいるようでした。

が行われていると分りました。

「子ども食堂」について、明確な定義はありません。農林水産省は「地域住民等による民間発の取組」として、無料または安価で栄養ある食事や温かな団らんを提供する「もの」としていますが、具体的な手法や制約、条件などの規定は定められていないのです。運営はボランティア方式などの市民活動が中心となっていますが、中には自治体が予算取りして事業化しているものもあるようです。

子ども食堂や地域食堂の取り組みは、近年全国的な広がりを見せています。これらは言い換えるなら、地域の居場所づくりの取り組みとも言えます。居場所づくりは「地域共生社会」の実現を可能とする手段のひとつとして位置付けられ、取り組み事例が加速度的に増加しています。平成30年4月に発表された「こども食堂安心・安全向上委員会」の調査結果から、全国2,286カ所で子ども食堂が開設されていることが判明。道内でも約100カ所で同様の取り組み

子ども食堂は共生食堂型とケア付食堂型に大別されています。共生食堂型とは、貧困家庭の子どもに限らず誰でも受け入れる食堂の形態。一方でケア付食堂型とは、個別の貧困問題に対応し課題解決を目指す食堂の形態をとります。とは言えども現在全国で拡がっている子ども食堂の多くは、いずれもこの2つに明確に区別されるものではなく、基本型は共生型でありながら、子どもを取り巻く環境を読み解くといった目的を持ったものもあるようです。

でも利用可能であり、そこに集う人と人がコミュニケーションを図りながら、比較的安価に食事ができることが特徴です。しかし、こちらは子ども食堂以上に厳密な定義はなく、実践事例の中にはコミュニティ・カフェなどと実質区別不能なものも含まれていると推察されます。また、全国でどれくらいの取り組み事例数があるかは把握しきれないと言われています。

食堂を介したこの二つの取り組みは、地域福祉の実践拠点づくりとしての性格を持ったものであることは間違いありません。そのため、民児協活動や社会福祉協議会活動とも親和性が高いと言えます。実際に道内で展開されている事業



ボランティアが支える厨房

の多くに、民生児童委員が何らかのかたちで参画しているものが少なくありません。



協働の意義とメリット（北翔G）



現場で指揮をとる北翔大学・尾形良子氏

尾形氏が率いるグループは現在、眞願寺のほかに、市内野幌地区にある「八丁目プラザのつぼ」でも同様の食堂イベントを開催しています。こうした取り組みを推進する理由について、尾形氏は「世代を超えて地域の人々が集える居場所が、地域の中に

必要だと考えたから。食堂は、その親和性が高い」と言います。今日、地域課題は多様化かつ複雑化の一途をたどり、従来型の福祉サービスに依存するだけでは、住みよい地域を持続することが困難になってきました。住民が「住んで良かった」と感じる地域を創出するには、住民自らが参画する、福祉とまちづくりの仕組みが必要です。

「当初は、徐々に参加者に役割意識が形成され、参加者も運営の担い手となってくれたらと考えていました。実際、参加者として食堂に来ていた住民がボランティアを申し出てくれたこともありま

す」。でもそれはほんの一握り。参加者の多くはサービスの受け手、つまり「お客様」としての意識



眞願寺住職・石堂了正氏による説法

協働の意義とメリット（眞願寺）

から脱していません。同様に学生スタッフもまた、その境界を越えられていないようだと言います。

「地域に密着する寺院であれば、より多くの住民参画の契機を見つけ出せる可能性があると考え

ました。そうした場所で学生が経験を積めることも、得難いチャンスに他なりません」。

野幌会場では地域の商工会と、考えを共有するネットワークができたと言う尾形氏。それは眞願寺でも同様ですが、何より民生

一方で、眞願寺としてはどんなメリットを得たのでしょうか。石

堂氏は、実に興味深い話をしてく

「かつて寺院は、地域における重要な集いの場として機能していました。宗派を超えて人々が集まり、共に喜んだり悲しんだりしながら時間と時代を共有していたものです」。そうした寺院の役割は、年を追うごとに希薄になっていきました。人々の意識がより個人主義的になり、相互不干渉が尊重される世相が広がるにつ

れ、地域と寺院のつながりは薄らいだのです。

かつて寺院の境内は、近所の子どもの格好の遊び場でしたが、屋内での遊びに関心が移るにつれ、子どもの姿は減っていききました。大人はおろか、子どもさえお寺に集うことの意味を失ったのです。

「寺院は宗派に関わらず、地域から愛されなければなりません。それは倫理や文化、平和や愛情といった、人にとって不可欠な心を共有する空間だからです。かつてのお寺はそうした空間として、自然発生的に地域の人々に認識されていきました。私たち宗教家は、今こそそうした寺院の在り方を問い直すべきだと思うのです」。

地域社会が抱える課題は、時

代と共に変化します。その変化に伴い、社会のニーズも変化します。だから「お寺が新しい共有価値を生み出して、あるいはその価値観の実現の場として、地域の人々に受け入れてもらうことが必要」と石堂さんは言います。

「新しい共有価値の創造とは、世界の持続可能性を本気で考える進歩的事業者が、近年その理念に象徴的掲げる考え方、もしくは言葉です。CREATIVE SHARE VALUEの頭文字を取って、CSVと呼べれます。

その精神は、自社だけが潤えば勝ちという従来の企業成長戦略ではなく、自らが仕事をするることによって、地球環境から健康・福祉、教育や人権など、人類が抱えるあらゆる共通課題の解消に効果が発揮できることこそが、事業家に課せられる使命だとします。

石堂さんが語った寺院の「新しい共有価値」とは、奇しくもCSVと同義と言えるのではな

いでしょうか。「宗門では、あらゆる世界に生きるすべての生命が、分け隔てなく救われていくと導かれます。今は狭義の宗

むすび

行政サービスの行き先に限界が見え始め、未来に対する不透明感と不信感が濃度を増す現代。こうした時代において、住民自治はますます重要なキーワードとなってきました。

住民自治の担い手は、住民自身であることは疑いようがありません。そしてそれを促すためには、それが機能する仕組みⅡガバナンスと、拠点となる場所用意する必要があります。

ちょうどこのプロジェクトがスタートしたころ、NPO法人「人間の安全保障」が、都道府県別に取りまとめた住民の幸福度指数を発表しました。この指数によれば、北海道は全国ワース

論に固執するのではなく、すべての生命を尊ぶという基本理念に立ち返って、地域の寺院の存在意義を組み立て直す時です」

ト5。つまり、北海道の住民は、不幸感を抱く人が相対的に多いことになります。

また、同法人は、孤独感のランキングも公表しました。こちらでも北海道は、孤独感が深い住民が最も多い地域グループに分類されています。

長い冬の間に閉ざされること、僻村が多いこと、そして所得水準が低いといった北海道の特徴が指数に影響しているかもしれないですが、要因はそれだけではないはずです。

人々が抱く不幸感の原因を推察し、特定する作業は大切です。しかし一方で、その原因をすべて排除することができるとは別

と石堂さん。その言葉には、地域の中で人々の拠りどころ、居場所となろうとする、良い意味での寺院の戦略が窺えます。

の問題。ならば、問題究明と並行して、今ある課題を、着手でできる部分から補完していくことも大切なはずですよ。

眞願寺と北翔大学のコラボレーションは、住民参画による地域福祉の重要な「装置」を誕生させたモデルケースと評価できるのではないのでしょうか。

失われた人と人との結びつきを取り戻す装置として、子ども食堂・地域食堂は重要な場です。同時にそこは、地域に暮らす人々が、自身の手で暮らしの持続性を担保する場でもあるはずです。

さて、こうした重要な局面に、民生児童委員がどう関わっていくか。そのあり方が問われています。

受章おめでとう

「令和元年 春の褒章・叙勲」

令和元年度、秋の褒章・叙勲で、受章された民生委員児童委員の方々をご紹介します。
(敬称略)

●秋の褒章叙勲受章者

褒章受章者

◆藍綬褒章

新谷 則 (函館市 元)
伊藤 欣也 (北見市 現)
松井 元 (芦別市 現)
渡邊 壘子 (上川町 元)

叙勲受章者

◆瑞宝双光章

三原 忠 (北見市 元)
高橋 勝 (稚内市 現)
石澤 淳子 (美幌町 現)
渡部 徳樹 (中標津町 現)

◆瑞宝単光章

大野 秀樹 (稚内市 現)
浦野 信子 (砂川市 元)
片岡 槇子 (石狩市 元)
岡本 克也 (奈井江町 元)
伊藤 二三 (島牧村 元)
岩本 守 (仁木町 元)
廣田 ミエ (利尻富士町 元)
小林 壽幸 (音更町 現)

この人

音更町民生児童委員協議会副会長
白木 幸久さん

音更町は、十勝総合振興局管内、道内の町村で最も多くの人口を抱えるまちです。大河・十勝川の支川である音更川や然別川などと、そこに流れ込む無数の小河川が作り上げた扇状地は広大な農地として利用され、小麦や小豆といった農作物は日本一の作付面積を誇ります。

また、古くから福祉意識が高いまちとしても知られる一方で、隣接する帯広市のベッドタウンとしての側面もあわせ持ち、比較的高い人口増加率を保ってきたまちでもあります。

このまちの民児協を支え続けてきた白木さんを訪ねました。



子どもの笑顔に囲まれて

音更川の右岸に開拓時代の面影をとどめる「こうえいの森」。手を伸ばせば木漏れ日に触れることができそうな森の傍らに、子どもたちの明るい声が響きます。

音更認定こども園は、幼保連携型の施設。白木さんは、この施設を運営する社会福祉法人の理事長です。

「十勝を拓いた先人の素晴らしい気質にならない、子どもたちにはたくましく育ってほしい。キャッチフレーズはニュー・フロンティアスピリットです」。だからとりわけて、子どもの健康づくりには、他の施設にはない特徴的なプログラムを取り入れているそう。「森での遊びはもちろん、体育教諭を2名雇用して、体づくりに力を入れています」。健康やかな身体には、人との関わりである「徳」や、学びの芽生えである「知」が宿るのだと、白木さん。

優れた専門性

白木さんの民児協におけるキャリアは、平成16年委嘱の主任児童委員に始まります。「古くは祖父が民生

委員を担っていました。その背中を見てきた私にすれば、役場から委嘱を打診された時も、何の違和感もありませんでした」。その後、同25年には民生児童委員へと転身。以来、全世代の住民のよりどころとして日々を送るようになりました。

白木さんと向き合うと、ある特徴に気づきます。それはとても客観的で、抑制された語り口調に現れています。白木さんは、高校卒業後、広島大学で人間科学を専攻した後、東洋大学の博士課程でも社会学を修められているのです。

一貫して人と社会、福祉の在り方について研究を続け、権威とも言い換えられる専門性を獲得。地域においては旧音更西保育園の副園長として、実業世界に飛び込んだ若いころの白木さん。誰よりも地域の持続性を願う熱い心を持ちながらも、常に冷静な状況分析を怠らないバランス感覚こそが、白木さんの持ち味なのでしょう。

地域の未来に向けて

元来、広大な土地を活かした農業が基幹産業だった音更のまち。ところが、帯広市と橋ひとつ隔てるだけの立地が影響して、特に地域の南側は大きくその姿を変えています。

「木野大通りには大型店が相次いで進出し、まるで都会のよう。居住者も若い世帯が増えて、かつての町民とは気質も変わってきました」と白木さん。だから、人々を取り囲む問題も、都会の問題が一定遅れて現れてくるのが音更の特徴だそう。

「ある意味で農村らしいホスピタリティが、このまちの特徴でした。でも、新しい街区では、その土着性が希薄になってきている。欠けていくものをつなぎとめるのが、福祉サービスの今の役割かもしれません」。主任児童委員数が5人と、人口にしては多い配置体制を敷いているのも、多様化する住民属性に対応しようとする意識の具現化のひとつ。

2040年の若年人口動態予測で、道内では稀な「安定自治体」とされている音更。まちの持続性を見つめ、福祉の在り方を探る白木さんらの発想が、混とした未来に光を投げかけるのかもしれない。

そんな白木さんは休日、カメラを肩にATB（全地形対応型自転車）でツーリングするのが趣味だそう。そうして十勝らしい風景に出会うと、ファインダーを覗くのだと言います。白木さんが切り取る風景はきっと、未来の地平に通ずる光に満ちていることでしょう。

失敗図鑑すごい人ほどダメだった



大野 正人 著
文響社
1,320円(税込)

内容

新しいことに挑戦する時、そこに失敗はつきものです。一方で、誰も失敗はしたくないもの。大人は経験と学習で武装して、安全な方法を選んだり、失敗を言い訳で正当化したりします。周囲はどうでしょう。失敗を叱責したり、嘲笑したりします。社会にとって、失敗はダメなことなのです。もともと失敗ばかり繰り返す人は、もしかすると行動規範の根本に問題があるのかもしれないが、いずれにせよ窮屈な世の中であることに変わりはありません。そして、そんな窮屈さは大人のそれだけでなく、子ども社会をも席捲しています。失敗を取り返しのつかぬ恥として、その後の永い時間に蓋をしてしまう子。新しいことにトライするのは馬鹿げているとして、無難な道を選ぶことに固執する子。小さな子どもはやがて大人になり、その悪弊を伝播していきます。

子ども世界は大人社会の写し鏡。だとするならば、子どもの発する光を鈍らせるのは、そうした風潮を作り出した大人といえます。では、本当に失敗はダメなのでしょうか。本書に登場するのは、古今東西を問わず、誰もが知っている偉人たち。でも彼らだっただけで、最初は失敗から始まったのです。他と違ったのは、失敗した時にどう行動したか。著者の言葉を借りるなら「失敗なんてどうでもいいじゃん!」です。そうしてトライ＆エラーを繰り返して、やがて栄光をつかむに至った様が、とても愉快なイラストを添え綴られています。「失敗したっていいじゃん」と笑える子どもが増えたなら、世界はきっと持続します。ページを開くたびに勇気づけられる本書。子どもだけでなく、疲れた大人にも薦めたい一冊。

災害に備える

③ 過去から学ぶ

平成18年4月、全民児連は民生委員制度創設90周年記念による災害時要援護者支援に備える防災キャンペーン『民生委員・児童委員発災害時一人も見逃さない運動』を展開しました。相次ぐ大規模災害の発生を教訓に、翌19年9月までの18カ月間を「第1次運動」とし、全国の約7割を超える法定単位民児協が参加しました。

運動期間中には「能登半島地震」や「新潟県中越沖地震」が発生。これらの災害時には、民生委員が整備してきた要援護者台帳や災害福祉マップが活用され、独居高齢者などの安否確認が迅速に進められました。

これを踏まえて全民児連は、『災害時一人も見逃さない運動』を継続し、さらに3年以上にわたる「第2次運動」を展開。国は「要援護者に係る情報の把握・共有及び安否確認等の円滑な実施について」(同19年8月10日付厚生労働省6課長通知)により、災害時の要援護者支援について必要な情報の共有を図り、民生委員児童委員と連携して取り組むことを市町村に求めることになりました。

同26年8月に広島県広島市で発生した土砂災害では、多くの死傷者が発生しました。広島市では災害発生以前より、子育て家庭

の孤立化を防ぎ、地域の中で安心して子どもを生き育てることができるよう支援するため、生後4か月までの赤ちゃんがいる家庭を民生委員児童委員が訪問する「こんにちは赤ちゃん事業」を実施していました。

これにより、対象世帯への迅速な支援が行えたほか、年齢や障がいの有無を問わず被災した住民のニーズを収集し、行政や災害ボランティアセンター等の支援機関につながるなど丁寧な支援活動が展開されました。

昨年7月、豪雨災害で甚大な被害を受けた岡山県倉敷市では、社会福祉協議会が開設した災害ボランティアセンターに毎日数百人のボランティアが支援に駆けつけました。また、市内に44ある法定民児協は、各民児協でシフトを組み、連日ボランティアの受付や活動後の衛生管理などを担いました。

胆振東部地震後、道民児連では胆振3町の民生児童委員を対象にした活動状況のヒアリングや支援活動情報交換会を実施。アンケート調査からは、各地の民生委員児童委員が日ごろの活動を活かした支援活動を行ってきたことが浮かび上がりました。

過去の災害で民生児童委員が果たした役割を知ることが、次への備えになるのです。

篠原辰二 一般社団法人ウエルビーデザイン代表